

長崎県埋蔵文化財センター調査報告書 第37集

はる
原の辻遺跡

令和元年度 原の辻遺跡調査研究事業調査報告書

2021

長崎県教育委員会

長崎県埋蔵文化財センター調査報告書 第37集

はる つじ
原の辻遺跡

令和元年度 原の辻遺跡調査研究事業調査報告書



長崎県教育委員会

カラー図版



閔縁地区調査区遠景



閔縁地区調査区近景



大川地区調査区遠景



大川地区調査区近景

発刊にあたって

本書は、国庫補助を受けて実施した、令和元年度原の辻遺跡調査研究事業の報告書です。

原の辻遺跡は、これまでの調査で、多重の環濠や日本最古の船着き場跡などが確認されるとともに、中国や朝鮮半島との盛んな交流を物語る数多くの遺物が出土していることから、中国の歴史書「魏志倭人伝」に記載された「一支國」の國邑と特定されました。「魏志倭人伝」の中には30余りの國の名前が記されていますが、國邑が特定されているのは原の辻遺跡だけであり、当時の國の規模や構造を解明できる非常に学術的価値の高い遺跡とされ、平成12年11月には弥生時代の集落遺跡としては全国で3例目の国特別史跡としての指定を受けました。また、昭和49年以降の発掘調査で出土した原の辻遺跡の遺物の中で、遺構や出土場所が明確で遺跡の時代や対外交流の歴史を裏付けることができる資料1,670点が、平成25年6月、重要文化財に指定されました。

令和元年度の範囲確認調査は、壱岐市芦辺町深江鶴亀触の閑縁地区と石田町石田東触の大川地区で実施いたしました。閑縁地区は過去の調査で弥生時代の墓域が確認されたところであり、今回の調査では遺構は確認されなかったものの、磨製石剣などの副葬品として用いられる遺物が出土しました。また、大川地区は古代の役所跡の存在が推測されているところであり、建物跡などは明らかにはなりませんでしたが、貿易陶磁器などの官衙に関連する遺物が出土しています。

発掘調査の実施にあたり、御理解と御協力をいただきました地元関係者の皆様方に深く感謝申し上げますとともに、これらの調査結果が学術的な資料として広く活用され、さらには地域の方々の郷土を理解する資料として役立てていただければ幸いです。

令和3年2月26日

長崎県教育委員会
教育長 池松誠二

例 言

1. 本書は、原の辻遺跡調査研究事業として実施した、令和元年度の原の辻遺跡発掘調査報告書である。
2. 本事業は、遺跡範囲内の環濠や旧地形等の状況調査を目的として、平成14年度から実施している。
3. 本書に収録した調査区の所在地は、長崎県壱岐市芦辺町深江鶴亀触及び石田町石田東触である。
4. 令和元年度の調査は、長崎県教育委員会が主体となり、長崎県埋蔵文化財センター東アジア考古学研究室が担当した。

調査組織

調査指導委員会 委員長 西谷 正（九州大学名誉教授）
委 員 大坪 志子（熊本大学埋蔵文化財調査研究センター准教授）
委 員 工楽 善通（大阪府立狹山池博物館館長）
委 員 佐古 和枝（関西外国语大学教授）
委 員 徐 光輝（龍谷大学教授）
委 員 高倉 洋彰（西南学院大学名誉教授）
委 員 武末 純一（福岡大学教授、現 福岡大学研究特認教授・名誉教授）
委 員 村上 恭通（愛媛大学教授）

〔委員記載は50音順〕

長崎県埋蔵文化財センター

所 長 石橋 明
(現 長崎県立島原高等学校主幹事務長)
東アジア考古学研究室 室長 寺田 正剛（整理・報告書担当、現 所長兼室長）
主任文化財保護主事 古澤 義久
(調査・整理担当、現 福岡大学人文学部准教授)
文化財保護主事 長岡 康孝
(調査担当、現 長崎県立壱岐高等学校教諭)
文化財調査員 鳩田 博子（事務担当）

調査協力 壱岐市教育委員会社会教育課

また、龍谷大学大学院生楊方昊、孟磐が研修の一環で調査補助（遺構実測など）を行った。
なお、調査を実施するに際し、調査区の承諾、駐車場やトイレ等の借用で以下の御協力をい
ただいた。記して感謝を申し上げたい。

〔閑緑地区〕 土地所有者 帯田満夫
耕作者 農事法人原の辻 理事長 山川輝光
〔大川地区〕 土地所有者 小野秀孝・岡本博行
調査協力 川本孝雄

5. 本書で使用した遺構実測は寺田と古澤が、遺構写真撮影は古澤と長岡が行った。
また、遺物の実測、トレースについては山口美代子と出口美由紀が、遺物写真撮影は寺田が行った。
6. 本書に収録した遺物・図面・写真類は、長崎県埋蔵文化財センターで保管している。
7. 本書で用いた座標は、旧日本測地系である。
8. 本書で用いた方位は、座標北である。
9. 本書で示した石器・石製品の蛍光X線分析データは、長崎県埋蔵文化財センターで分析した。
10. 報告書に用いた基本層序及び出土遺物観察表の色調については、『新版標準土色帖』（富士平工業株式会社）を参考にした。
11. 本書の執筆・編集は、寺田が行った。

本文目次

I 遺跡の立地する環境	
1. 地理的環境	1
2. 歴史的環境	2
II 調査に至る経緯と進行	
1. 調査の経緯	5
2. 調査の進行	9
III 調査	
1. 関縁地区の調査	
(1) 調査概要	9
(2) 基本層序	11
(3) 出土遺物	12
(4) 小結	15
2. 大川地区的調査	
(1) 調査概要	15
(2) 基本層序	15
(3) 遺構	20
(4) 出土遺物	20
(5) 小結	25
III まとめ	
(1) 原の辻遺跡における関縁地区の位置づけ	25
(2) 原の辻遺跡における古代（7世紀から12世紀）の様相	26

挿図目次

第1図	壱岐島地質図	1
第2図	深江田原平野周辺の弥生時代から古代にかけての遺跡分布	3～4
第3図	原の辻調査研究事業 調査計画 平成24年度～令和3年度	7
第4図	令和元年度 調査研究事業調査区位置図	8
第5図	令和元年度 閨縁地区調査区位置図 (1/3,000・1/1,000)	10
第6図	令和元年度 閨縁地区土層堆積状況 (1/60)	11
第7図	令和元年度 閨縁地区出土遺物 (1/2・2/3)	13
第8図	令和元年度 大川地区調査区位置図 (1/1,500)	16
第9図	令和元年度 大川地区調査区及び遺構配置図 (1/150)	17
第10図	大川地区 溝状落ち込み検出状況及び土層図 (1/80)	18
第11図	大川地区 階段状遺構検出状況及び土層図 (1/80)	19
第12図	令和元年度 大川地区出土遺物 ①(土器・陶磁器等) (1/2)	22
第13図	令和元年度 大川地区出土遺物 ②(石器) (2/3)	23
第14図	令和元年度 大川地区出土遺物 ③(石器・石製品) (2/3)	24
第15図	原の辻遺跡における古代から中世初期にかけての遺物出土地点	27

表目次

第1表	深江田原平野周辺の弥生時代から古代にかけての遺跡一覧表	4～5
第2表	令和元年度 閨縁地区出土遺物観察表	14
第3表	令和元年度 大川地区出土遺物観察表	24～25
第4表	原の辻遺跡における古代から中世初期にかけての出土地区及び出土遺跡一覧表	28

写真目次

カラー図版 閨縁地区調査区遠景 閨縁地区調査区近景 大川地区調査区遠景 大川地区調査区近景		
図版1	調査区近景 (閨縁地区) 表土剥ぎ (閨縁地区) 作業風景 (閨縁地区1b区)	
図版2	閨縁地区1a区北壁土層堆積状況 (南から) 閨縁地区1b区北壁土層堆積状況 (南から) 閨縁地区1b区石礫出土状況	
図版3	閨縁地区3b区北壁土層堆積状況 (南から) 作業風景 (閨縁地区3b区) 壱岐市立石田小学校遺跡見学 (閨縁地区)	
図版4	作業風景 (大川地区) 作業風景 (大川地区) 航空写真撮影作業風景 (大川地区)	
図版5	大川地区階段状遺構検出状況 (1A区～3A区) (南から) 大川地区3A区石器出土状況 大川地区溝状落ち込み検出状況 (4C区) (南から)	
図版6	大川地区4D区ピット検出状況 (南から) 大川地区5B区遺物出土状況 (南から)	
図版7	壱岐高校コース体験発掘 (大川地区) 龍谷大学学生測量補助 (大川地区) 原の辻遺跡調査指導委員会 (大川地区)	
図版8	令和元年度 閨縁地区出土遺物 (左が表、右が裏)	
図版9	令和元年度 大川地区出土遺物 (左が表、右が裏)	

I. 遺跡の立地する環境

1. 地理的環境

原の辻遺跡が所在する壱岐島は、九州と朝鮮半島との間に位置する東西約15km、南北約17km、面積約139km²の島である。島内で最も高い山は、島南部の岳の辻の標高213mであり、全体的に平坦で起伏が乏しい地形である。島の地質は全体の9割以上が玄武岩地域（第1図）であり、島北部の一部に古第三紀に形成された砂岩・泥岩による勝本層が露出しており、その良質な部分は頁岩として遺跡出土の石器の素材として利用されている。

島の位置としては、佐賀県唐津市までが約30km、対馬市厳原までが約70km、韓国釜山までが約160kmであり、壱岐島北部の勝本町からは対馬を見ることができ、また対馬島北部の上対馬町、上県町からは韓国の島影を見ることができる距離である。

原の辻遺跡は、壱岐島の南東の標高6mの低地部から18mの丘陵部にかけて立地する遺跡である。遺跡の北側低地部には、島内で最も流路が長い幡鉾川（はたほこがわ）が流れしており、この川の流れの作用により、「深江田原（ふかえたばる）」という沖積平野では県内二番目の広大な水田地帯が形成されている。また、遺跡の東側には内海（うちめ）と呼ばれる湾入約3.5km、水深10m以内の浅い湾が入り込んでおり、幡鉾川はこの湾に流れ込んでいる。原の辻丘陵から内海までの距離は約1.5kmであり、比高差は約5~6mで流れは緩やかである。また、幡鉾川の河口周辺は切り立った崖が両河岸まで迫っている。

遺跡の中心部の丘陵は玄武岩台地の上に形成された地形で、先端は後世の削平などにより岩盤が露出している。昭和30年ごろまでは畠土を高く盛り上げたまんじゅう畠の風景が見られた地域であったが、今はその名残をほとんど見ることができない。また低地部は、平成4~14年度にかけて幡鉾川流域総合整備事業で広大な圃場が造成されており、当時の景観とは趣を異にしている。



第1図 壱岐島地質図

2. 歴史的環境 ～原の辻遺跡周辺の弥生時代から古代の遺跡を中心に～

原の辻遺跡は、旧石器時代、弥生時代前期から古墳時代前期、奈良時代までの遺構・遺物を包蔵する複合遺跡である。特に弥生時代中期から後期にかけての多重にめぐる環濠集落や船着き場跡など、高度な技術と組織力を駆使して構築された遺構や、中国・朝鮮半島をはじめ国内外との交流を物語る豊富な出土遺物は全国でも類を見ない遺跡である。

原の辻遺跡が形成された背景について若干触れるすれば、壱岐島内の縄文時代の遺跡は20箇所ほどあげられるが、弥生時代につながる縄文時代晚期以降の遺物が出土する遺跡は極めて少ない。また、それら遺跡の分布も壱岐島西側に偏っており、原の辻遺跡周辺にはあまり確認されていない。これらのことから考えれば、原の辻遺跡の成立は内在的に派生したものとは考えにくく、島外からの移民によるものと考えたほうが自然であろう。

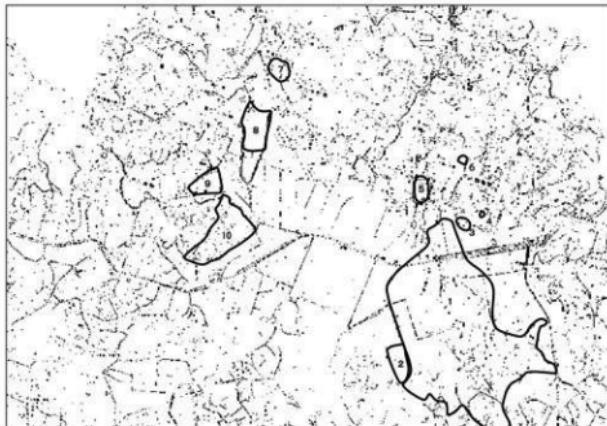
第2図は原の辻遺跡がある深江田原周辺の弥生時代から古墳時代、古代にかけての遺跡の分布である。弥生時代の遺跡は深江田原東側の原の辻遺跡周辺と西に離れた深江田原西側丘陵部に分かれて分布している。原の辻遺跡及びその周辺では、丘陵中心に居住域、周辺に墓域という大きな集落構成が確認される。2の鶴田遺跡は原の辻丘陵の西側にあたり、弥生時代中期中葉の壱棺墓のみで構成され限られた期間に形成された墓地である。壱棺墓は小型の合わせ口または石蓋の形態であり、時期的にも原の辻集落に属する人々の墓地の様相が強い。一方、3の閑縁（みやくり）遺跡は弥生時代前期末から中期中葉を中心とする壱棺墓、箱式石棺墓、石蓋土坑墓などによる列状埋葬の墓域である。原の辻丘陵の北側対岸にあたり、集落形成から若干遅る時期にあたることから、集落とは格差のある集団の墓地の様相を感じる。7～10は弥生土器が出土した遺物包蔵地であり、明確な遺構は確認されていない。ただ、幡鉢川流域にあたり上流には郷ノ浦町車出遺跡などの大規模な弥生遺跡があることから経路上にある遺跡としての位置づけが考えられる。

古墳時代になるとその分布は高台上に展開する。7世紀代に見られる大規模な巨石古墳はないものの、時期的に古く小中規模の古墳が2～3基程度の群をなし散在している。居住域については明確ではないが、深江田原西側の觀城遺跡で4世紀から5世紀にかけての住居跡や6世紀代の須恵器、興触遺跡からは古墳時代後期の須恵器などが出土しており、原の辻遺跡から続く生活域の変遷が予想される。

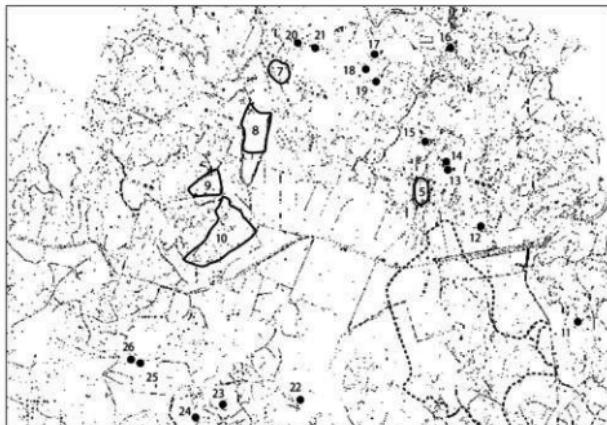
古墳時代の遺構・遺物の状況はその後の古代につながるところでもあり、興触遺跡・興触川上遺跡などで8世紀から12世紀代の須恵器壺身・壺蓋や縁軸陶器、白磁、越州窯青磁などが出土しており、古代から中世にかけての地域拠点が推測できる。一方、地図の中には示されていないが、古代の遺物は原の辻遺跡南側丘陵部の大川地区に多く見られ、さらにその南側の印通寺港周辺に同時期の遺跡が点在する。つまり、印通寺港から大川地区、そして木簡が出土している石田高原地区、道路状遺構などが確認されている川原畠地区を通る古代の経路が、深江田原北域を通り西側まで至ると推測できよう。令和元年度に長崎県埋蔵文化財センターが長崎県立壱岐高等学校東アジア歴史・中国語コースの生徒とともに発掘調査を実施した定光寺前遺跡からは、11世紀から12世紀代の土師器、貿易陶磁器等出土しており、今後の調査の進展に合わせ解明できると思われる。

[参考文献]

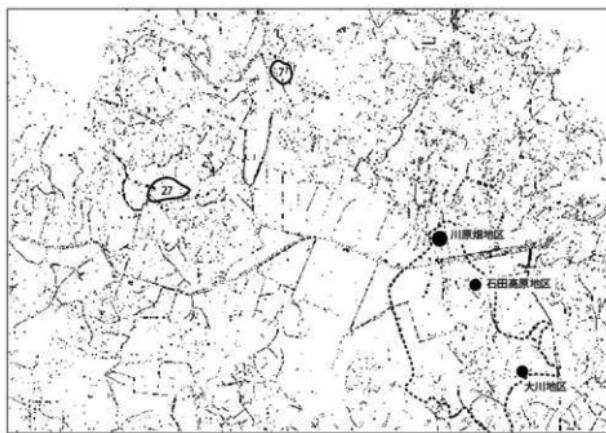
- 山下英明・川口洋平編1997『原の辻遺跡・安国寺前A遺跡・安国寺前B遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第1集 長崎県教育委員会
川口洋平編 1997『根城跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第3集 長崎県教育委員会
川口洋平編 1998『鶴田遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第6集 長崎県教育委員会
川口洋平編 1998『興触遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第7集 長崎県教育委員会
杉原敦史編 1999『興触跡・興触川上遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第12集 長崎県教育委員会
村川逸朗 1999『興触川上遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第13集 長崎県教育委員会
安楽 勉 1999『閑操遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第17集 長崎県教育委員会
宮本一夫編 2018『壱岐原の辻閑操遺跡・妙泉寺古墳群・鬼の窟古墳』九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室
山口優 2012『壱岐の島の古墳群～現状調査』壱岐市文化財調査報告書第20集 長崎県・壱岐市教育委員会



第2図-1
弥生時代の遺跡分布



第2図-2
古墳時代の遺跡分布



第2図-3
古代の遺跡分布

第2図 深江田原平野周辺の弥生時代から古代にかけての遺跡分布

第1表 深江田原平野周辺の弥生時代から古代にかけての遺跡一覧表

[弥生時代]				
番号	遺跡名	種別	立地	標高
1	原の辻遺跡	環濠集落・墓地・水田など	丘陵・平野	6m~18m
2	鶴田遺跡	墓地（甕棺墓）	丘陵	10m~15m
3	間縫遺跡	墓地（甕棺墓・石棺墓・土坑墓など）	丘陵	10m~15m
4	松尾遺跡	墓地（石棺墓）	台地	22m
5	安国寺前遺跡	包蔵地	丘陵	8m~10m
6	清水遺跡	墓地（甕棺墓）	台地	60m~70m
7	定光寺前遺跡	包蔵地	丘陵	40m
8	觀城遺跡	包蔵地	丘陵	16m
9	興触遺跡	包蔵地	丘陵	13m
10	興原遺跡	包蔵地	丘陵	10m~25m

[古墳時代]				
番号	遺跡名	形態・石室	立地	標高
11	柏田古墳	円墳（径10m）	丘陵	50m
12	玉塚古墳	円墳（横穴式石室・径7m+a）	丘陵	26m
13	俵山新古墳	円墳	丘陵	70m
14	俵山古墳	円墳（豊穴式石室）	丘陵	72m
15	鶴亀鬼屋古墳	不明（横穴式石室）	丘陵	50m
16	大塚山古墳	円墳（豊穴系横口式石室）	丘陵	74m
17	堂山1号墳	円墳（径3m）	丘陵	60m

18	堂山2号墳	円墳（径2.5+a）	丘陵	58m
19	堂山3号墳	不明	丘陵	70m
20	観上山1号墳	前方後円墳（横穴式石室・長29m）	台地	80m
21	観上山2号墳	前方後円墳（長10m+a）	台地	80m
22	清水遺跡	包藏地	丘陵	16m
23	神ノ嶺古墳	円墳（径8m）	丘陵	24m
24	坂本古墳	円墳（横穴式石室・径6m）	丘陵	32m
25	大原天神の森古墳1号墳	前方後円墳（長27m）	台地	30m
26	大原天神の森古墳2号墳	前方後円墳（長24m）	台地	30m
[古代]				
番号	遺跡名	種別	立地	標高
27	興触川上遺跡	包藏地	谷間	14m

II. 調査に至る経緯と進行

1. 調査の経緯

原の辻遺跡の調査の歴史は、1904～1905（明治37～38）年の松本友雄氏による表面採集に端を発する。1927（昭和2）年にまとめられた『壱岐考古録第一編』では、「深江の弥生土器三個」「深江原の辻は貝塚あらざるか」、「深江原の辻採集日録」の中で、田地の灌漑のための開墾工事の際に大型土器2点、小型土器数個を発掘したことや、石斧・石鎌・石錐の採集記録などの記録があり、その中に鳥居龍造氏が原の辻遺跡や出土遺物を実見したことも書かれてある。その報告は『考古学雑誌十二（七？）ノ二』「壱岐國考古通信（一）」にも掲載され、「深江原の辻（田河村）の遺物包含地」として全国に紹介された。鳥居氏のほか、梅原末治氏、中山平次郎氏、森本六爾氏、鏡山猛氏などの研究者たちも来島し調査を行っている。その後、松本氏は1931（昭和6）年の『探古日録第二輯』「原の辻研究」の中で、再度、1923（大正12）年から1927（昭和2）年までの調査報告をまとめている。1939年（昭和14）、鶴田忠正氏は耕地整理工事で削り取られた原の辻台地北端の東斜面に3層の遺物包含層を確認し発掘調査を行った。各層から出土した形態や技法の異なる土器の観察により、北部九州弥生土器編年と比較し、中期（須玖式）から後期（高三瀬式）に移行する過程を位置づけた。

1951（昭和26）年から1961（昭和36）年にかけては、東亜考古学会による5次にわたる調査が実施されている。その成果は、水野清一・岡崎敬両氏が『対馬の自然と文化』「壱岐原の辻弥生遺跡調査概報」で報告され、1層（上層）が須玖式と高三瀬式の中間形式、2層（下層）が須玖式という、「原の辻上層式・下層式」の様式編年が設定された。

長崎県教育委員会が主体となった調査は、1974（昭和49）年の石田大原地区の調査からである。“まんじゅう畑”の土地基盤整備による削平工事で、壺棺石や石棺材が多量に散乱しているとの連絡が石田町教育委員会を通じてあり、緊急調査を実施することになった。約1,000m²の調査範囲に、壺棺墓51基、石棺墓19基以上、溝4条が確認され、副葬品として戦国式銅剣、トンボ玉、ガラス小玉などが出土している。

その後幾度かの調査により、遺跡の規模が広範囲に及ぶことが判明し、翌、昭和50年度から国庫補助事業による4次にわたる範囲確認調査が実施された。大川地区、原の久保A地区、原の久保B地区などの墓域が発見され、大川地区においては、方格規矩鏡や有鉄銅鏡などが出土している。また旧石器時代の石器の出土もあり、「原の辻型台形石器」の呼称が設定された。

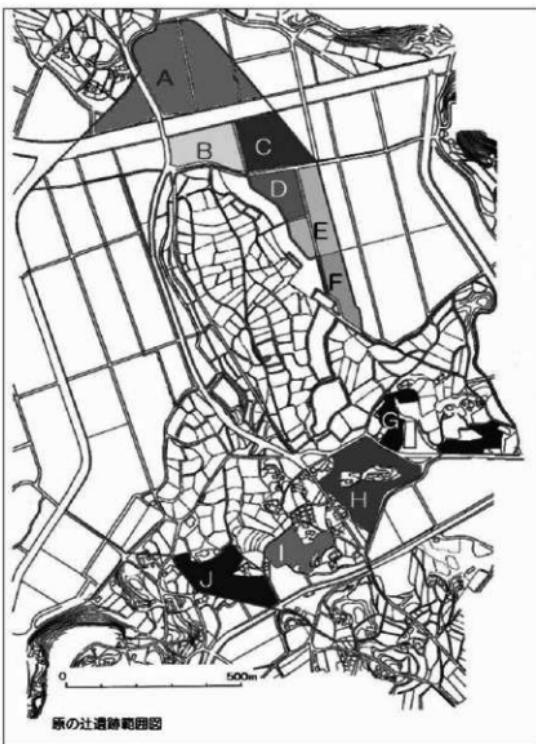
平成元年度、幡鉢川流域総合整備事業の計画が策定された。平成2年度に原の辻遺跡を含む幡鉢川流域の計画区域内320haの分布調査、平成3年度に芦辺町・石田町両教育委員会を調査主体とした計99ヶ所396m²の範囲確認調査が実施された。遺跡西側と北側で弥生時代から中世にかけての溝状遺構、杭列遺構が検出され、遺跡の範囲が約80haの広大な面積に広がることが明らかになった。

平成5年度には、台地の東側の農道建設工事および排水路敷設に伴う緊急調査（本調査）で環濠の一部が確認され、西側の部分においてもその延伸のため範囲確認調査が実施されたところ、丘陵のまわりを濠がめぐる大規模な環濠集落であることが判明した。このような経過を受け、原の辻遺跡が大規模な環濠集落であり、大陸との交流を物語る資料が豊富に含まれていることから、平成9年9月国史跡に指定され、さらにその後の調査研究により、原の辻遺跡が「魏志倭人伝」に記述される「一支国」の中心集落であることが特定されたため、平成12年11月国の特別史跡に指定された。その後、壱岐市教育委員会が主体となり原の辻遺跡指定地内の史跡整備が進み、平成21年度末「原の辻一支国王都復元公園」として公開されている。

原の辻遺跡調査研究事業は、環濠などの重要遺構を確認し特別史跡追加指定の基礎資料を得るという目的で、平成14年度から継続的に実施している。この事業の主な成果としては船着き場跡の発見が挙げられる。船着き場跡は平成8年度に圃場整備に伴う発掘調査で遺跡西側低地部に確認された遺構であり、日本最古である。その形状を確認するため周辺で範囲確認調査を実施したところ、弥生時代中期から後期前半に大規模な河川の中につくられた島状の地形であったことが確認された。

現在行われる調査は、文化庁との協議の上、平成24年度から10年間の計画で行われているものであり、遺跡の北東側から南側にかけての地域を対象に実施している（第3図）。遺跡の北側は圃場整備に伴う発掘調査で丘陵がさらに北域まで延びることが予想されており、溝や濠などが確認されている。また、東側には複数の環濠とそれから東側に続く道路状遺構が確認されており、更なる遺構の存在が予想される地域である。南側に関しては広範囲な調査がこれまで行われておらず、南側の環濠の状況や墓域、そして古代の遺構の範囲について確認することを目的としている。遺跡の北側は大規模な蛇行した自然河川（幡鉢川）があったことがわかり、その周囲に住居跡や建物跡、土坑などがあることが確認された。また自然河川の南側には2状の溝が確認され、河川につながることが想定されている。この溝の上流は丘陵東側の環濠と想定されており、現在も絶え間なく湧水がある地域である。以前から溝か濠かという議論がある地域ではあるが、過去に中尾篤氏（中尾2005）や古澤義久氏（古澤2018）が述べている排水のための溝という機能が有力と考えられている。

令和元年度の調査は閑緑地区と大川地区で実施した（第4図）。原の辻丘陵北側対岸部の閑緑地区は、1954（昭和29）年3月土木工事の際に発見され、同年3月から4月にかけて東亜考古学会により発掘調査が実施された。5基の箱式石棺墓と16基の甕棺墓が検出されている。箱式石棺墓からは碧玉製管玉が出土しているが時期は不明で所在もわからなくなっている。甕棺墓は現在壱岐市が九州大学から譲与され保管しており、弥生時代前期末から中期前半に比定できる。また、平成7年度及び平成



年	地点	地区	予想される遺構・遺物
H24	A	川原畠地地区	旧河道・古代道路状遺構
H25	A	川原畠地地区	旧河道・土坑ピット群
H26	I	原の久保地区	墓域
H27	B	芦辺高原地区	河川跡
H28	B	芦辺高原地区	溝の延伸状況
H29	I	原の久保地区	墓域周辺の遺構
H30	C	芦辺高原地区	環濠
R1	A・H	閑緑地区・大川地区	墓域・古代官衙跡
R2	A	閑緑地区	溝・墓域
R3	G・H	大川地区	古代官衙跡

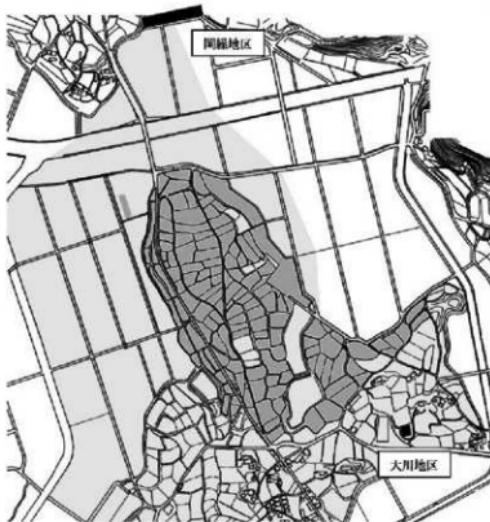
※令和元年11月18日修正

第3図 原の辻調査研究事業 調査計画 平成24年度～令和3年度

10年度に長崎県教育委員会が轄
鉢川流域総合整備計画に伴い発
掘調査を実施し、箱式石棺墓9
基、甕棺墓7基、土坑墓11基が
確認されている。詳細な調査は
行われず現地保存として埋め戻
されており、側溝工事に係る1
号石蓋土坑墓のみ記録保存調査
が実施された。今回の調査区は
その墓域の西側にあたり、遺構
の広がりを確認するために調査
を実施した。

大川地区は原の辻遺跡南東側
丘陵部にあたり、これまで墓域
や古代の遺物包含層が確認され
ている。今回の調査区の周辺は、
町道改良工事及び圃場整備に関
連した農道拡幅工事に伴う発掘

調査や、保存目的のための発掘調査により、8世紀から10世紀ごろの初期貿易陶器や綠釉陶器、イ
スラム陶器などが出土したところである。いずれの調査地も低地部であり、今回は建物跡などの遺構
の存在が予想される高台に調査区を設定し、発掘調査を実施した。



第4図 令和元年度 調査研究事業調査区位置図

〔参考・引用文献〕

- 安楽 勉 1999『間縫道路』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第17集 長崎県教育委員会
安楽 勉編 2000『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第18集 長崎県教育委員会
川口洋平 1995『原の辻遺跡Ⅱ』石田町文化財保護協会調査報告書第2集 長崎県石田町文化財保護協会
中尾篤志編 2005『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第31集 長崎県教育委員会
福田一志編 2005『原の辻遺跡総集編Ⅰ』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第30集 長崎県教育委員会
古澤義久編 2018『原の辻遺跡』長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第27集 長崎県教育委員会
松本友雄 1927『壱岐考古錄第一編』
松本友雄 1930『探古日録（一）』
松本友雄 1931『探古日録（二）』
宮本一夫編 2018『壱岐原の辻間縫道路・妙泉寺古墳群・鬼の窟古墳』九州大学大学院人文科学研究院考古
学研究室
山下英明・川口洋平編 1997『原の辻遺跡・安国寺前A遺跡・安国寺前B遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査
報告書第1集 長崎県教育委員会

2. 調査の進行

令和元年度の調査は、令和元年11月5日から12月24日まで実施した。当初は閑縁地区のみの調査区を計画していたが、重機による表土剥ぎと造成土の掘削を行ったところ、圃場整備による造成土が非常に厚く、人力による掘り下げ及び調査区の拡張が困難となつたため、安全面に配慮し一部の調査区の掘り下げにとどめ、急速次年度以降予定していた大川地区の調査を前倒して追加した。したがつて最終的な調査面積は485m²となった。発掘調査の主な内容は以下のとおりである。

令和元年11月5日（火）晴れ 閑縁地区的調査区設定（1区～3区）

11月6日（水）晴れ 重機による表土剥ぎ。作業員雇用開始。環境整備等実施。

11月8日（金）晴れ 重機による表土剥ぎ及び造成土掘削が終了。すべての調査区で造成土が厚く堆積することを確認。特に2区及び3区は湧水があり、作業員を入れて深く掘り下げるには困難であると判断。1区及び3b区のみを掘り下げることにした。

11月11日（月）曇りのち晴れ 大川地区的調査区交渉・確定。

11月15日（金）晴れ 壱岐市立石田小学校5・6年生が見学。

11月19日（火）曇り 大川地区的調査区設定。5m四方のグリッドを設定。北から南に1区～5区、東から西へa区からd区と付号する。

11月20日（水）晴れのち曇り 大川地区の人力による表土剥ぎ及び掘り下げ開始。午後、壹岐高校コース生徒発掘体験（1・2年生徒27名・引率2名）。

11月27日（水）曇りのち雨 大川地区 壱岐高校コース生徒発掘体験（2年生8名・引率1名）

11月29日（金）晴れ 大川地区に龍谷大学学生2名調査参加（12月3日まで）

12月5日（木）曇り 原の辻遺跡調査指導委員会

12月9日（月）曇りのち晴れ 原の辻遺跡調査指導委員 武末委員の調査指導

12月10日（火）曇り 空中写真撮影（閑縁地区・大川地区）

12月11日（水）曇り 閑縁地区埋め戻し（13日まで）

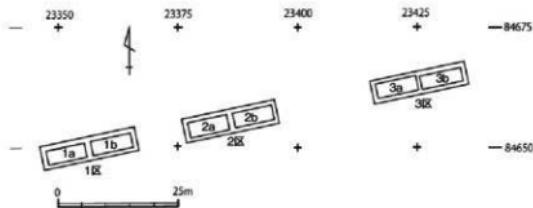
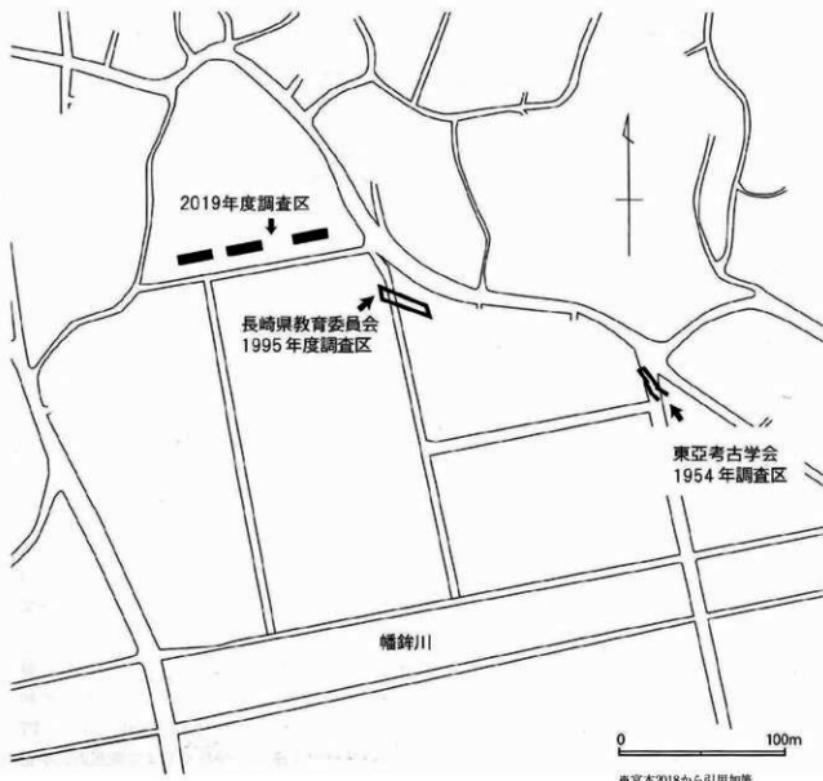
12月23日（月）晴れ 大川地区発掘調査完了、埋め戻し（24日まで）

III. 調査

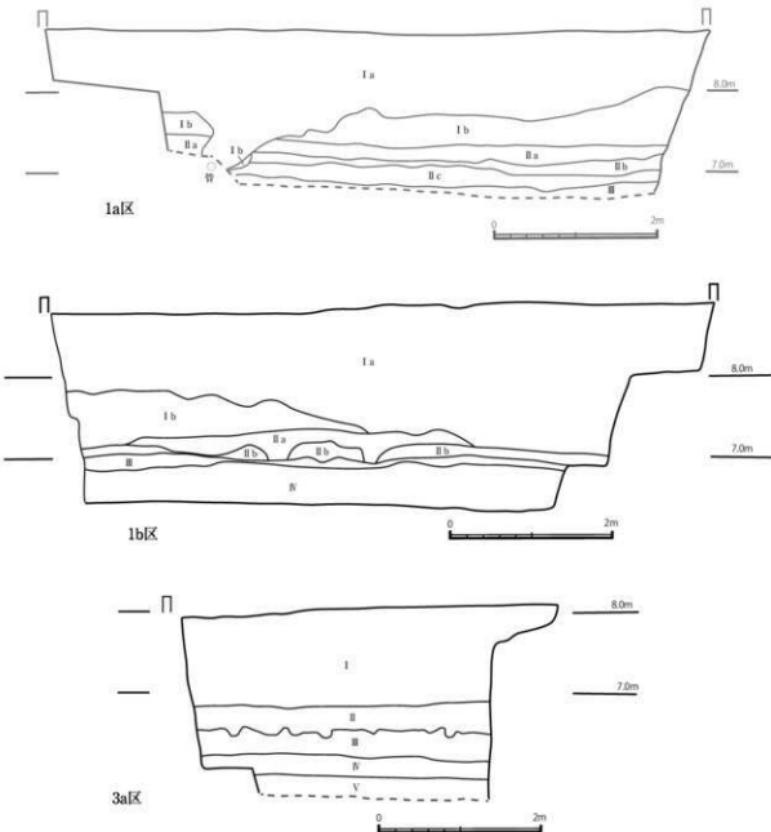
1. 閑縁地区的調査

(1) 調査概要

閑縁地区的調査区は、圃場整備の際に東西方向に10m間隔で埋設されている暗渠排水を避けるように、5m×20mの調査区を3ヶ所設定し、西側から1区・2区・3区とした。また調査区の表土及び造成土を重機で除去した後に、安全面を考慮してコンバネ幅（1.25m）でテラス状の段を周囲に残し、2.5m×8.25mの小区画を各調査区に2ヶ所ずつ設定した。ただ、前章で述べたごとく、圃場整備時の造成土が当初予想していた深さより非常に深く、また2区・3区を中心に造成土の中から湧水があつたため、すべての調査区を人力で掘り下げることが困難と判断し、1区の小区画2ヶ所と3区の小区画1ヶ所に限り調査を行つた。



第5図 令和元年度 間縁地区調査区位置図 (1/3,000・1/1,000)



第6図 令和元年度 関縁地区土層堆積状況 (1/60)

1区は造成土が2m近くあるもののその下の地層は比較的安定しており、下層からは中世から弥生時代の遺物が含まれていた。ただ、調査区の幅が狭く遺構の有無については十分に確認できなかった。また、3区は造成土中から鉄分を多く含む湧水があり、下層の旧耕作土及び堆積土も粘質が強く、小区画の半分のみ掘り下げて終了した。最下層には摩滅した弥生土器が出土している。

(2) 基本層序 (第6図)

1区と3区では造成土以下の層位が異なることから、それぞれに説明する。

[1区]

- I層 造成土 下層（Ib）には黄灰色粘質土がブロック状に入る。旧耕作土もしくは周辺からの搬入土の可能性あり。
- II層 旧耕作土 灰色粘質土（N5/0）空気に触ると酸化し、黄灰色粘質土（2.5Y5/1）に変色する。炭化物が混在。下層は上層に比べ砂礫が入りやや硬質である。
- III層 灰黄褐色（10YR5/2）硬質粘土。マンガンの沈着が見られる。弥生時代から中世の遺物を含む。
- IV層 にぶい黄褐色（10YR5/4）硬質粘土。マンガンの沈着あり。上層に弥生時代の遺物を含む。下層から石鎚が出土。

[3区]

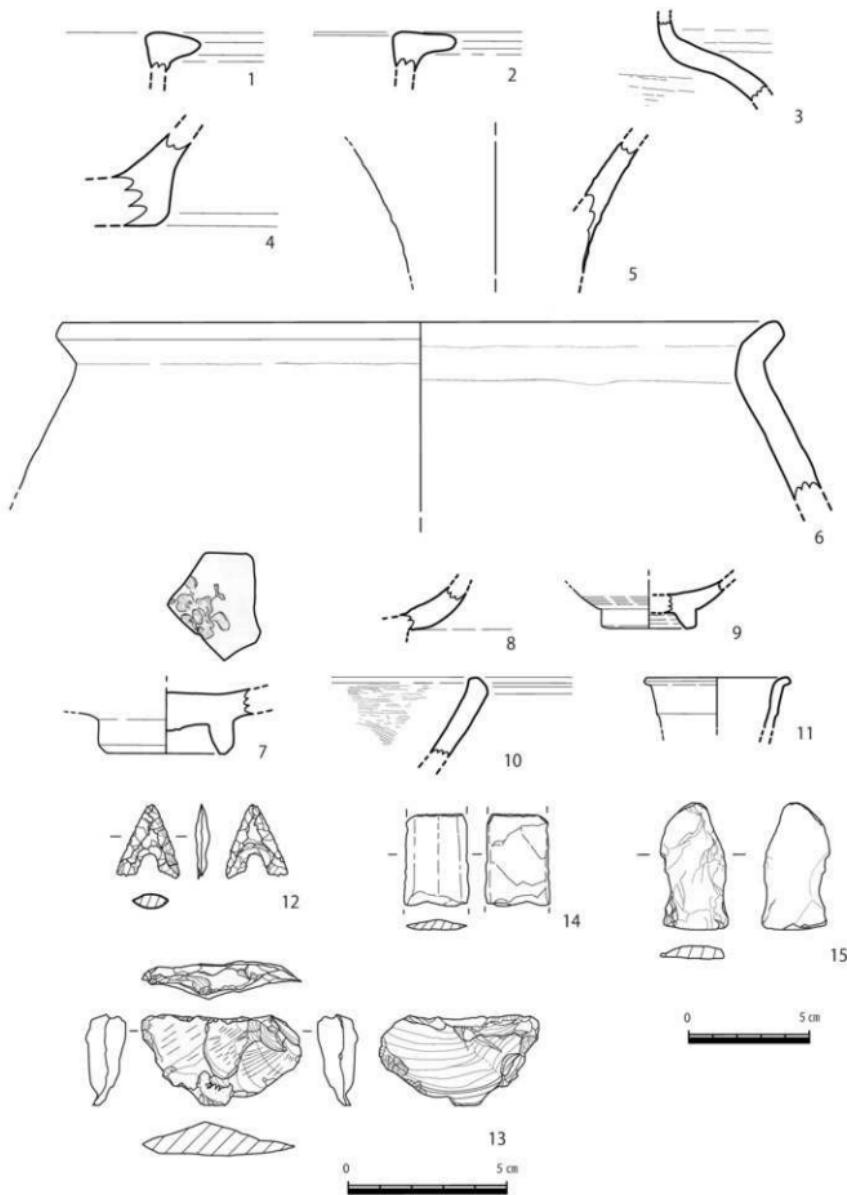
- I層 造成土
- II層 旧耕作土 灰色粘質土（N5/0）空気に触ると酸化し、黄灰色粘質土（2.5Y5/1）に変色する。
- III層 暗灰色（10YR5/1）粘質土。炭化物・有機物を混在。
- IV層 灰色（N4/0）粘質土。粘質が強くしまりがない層。砂粒を多く含む。
- V層 暗灰色硬質粘土。IV層よりも粘性が強くしまりがある層。弥生土器を含む。

1b区から3区にかけては旧耕作土面の高さが標高約7.0mであることから旧地形は低く、その西側のIa区にかけては少しづつ高くなることが想定できる。1区の旧耕作土以下の地層は安定しており、水平の堆積状況が観察される。また下層にいくにつれて粘質から硬質へ変化することから地山面に近づくことが推測される。ただ地山の確認はできなかった。3区は東側の丘陵に近く、墓域の広がりが確認される最も有力な調査区であったが、III層に炭化物や有機物が多く、IV層以下についても粘土質が強い地層である。現在、調査区の東側沿いに側溝が設置されており、山手からの湧水が絶え間なく流れていることから圃場整備前の旧地形の頃からもともと水みちがあったことが想定される。したがって墓域が立地する丘陵は今回の調査区までは伸びていないと判断される。

(3) 出土遺物（第7図・第2表）

打製石鎚、黒曜石剥片、弥生時代の土器・石器、中世から近世にかけての陶磁器などが出土している。いずれも磨滅が顕著であり、原位置を留めているものは少ない。以下、形状や部位が明確な遺物を中心に説明する。

1は甕口縁部で、口唇の外への太く短い張り出しがつくことから弥生時代前期末の特徴をもつ。2も逆L字形の甕口縁部で、比較的短い形状。弥生時代中期前葉か。3は壺の頸部から胴部にかけての部位で、内外面ともに暗灰色の色調である。全面に摩滅がみられるものの内面下位に平行叩きの痕跡がのこり楽浪系瓦質土器と思われる。4は甕底部で、底部の厚さは約2cmであることから弥生時代中期前葉の様相を示す。5は甕の胴部下半部で、上位に行くにつれて外反する形態。底部は胴部に張り付く形態であり、弥生時代中期後半の様相を示す。6は甕口縁部で、口径は約30cmである。口縁は非常に短く、外面は「く」の字形に外反し、内面は稜を持たず丸くおさめられている。色調は淡橙色であり、造成土層からの出土であることから、時期は未定。擬無文土器の可能性を残すことから図化した。



第7図 令和元年度 間縁地区出土遺物 (1/2・2/3)

第2表 令和元年度 関係地区出土遺物観察表

[土器・陶磁器]

番号	調査区	層位	器種	部位	色調		粘土	備考
					外	内		
1	1b	III	壺	口縁部	明褐 (7.5YR5/6)	にぶい黄褐 (10YR5/4)	長石・石英	摩滅が顕著
2	1b	III	壺	口縁部	黄褐 (10YR5/6)	橙 (7.5YR6/6)	長石・石英	摩滅が顕著
3	1a	III	壺	肩部	黄褐 (2.5Y5/1)	褐灰 (10YR6/1)	微細	摩滅が顕著
4	1b	III	壺	底部	にぶい黄褐 (10YR5/4)	にぶい黄褐 (10YR7/3)	長石・石英	摩滅が顕著
5	1a	1b	壺	胴下半部	橙 (7.5YR6/6)	オリーブ褐 (2.5Y4/3)	長石・石英・金雲母	摩滅が顕著
6	1a	1b	壺	口縁部	にぶい黄褐 (10YR7/2)	灰黄褐 (10YR6/2)	石英・角閃石・赤色土粒・金雲母	
7	1a	1a	青磁碗	底部	灰オリーブ (7.5Y6/2)	オリーブ灰 (10Y6/2)	微密	花弁状の刻印・鹿泉窯
8	1a	IIa	青磁碗	底部	灰白 (7.5Y7/2)	灰白 (7.5Y7/2)	微密	貫入多し
9	1a	1b	天目碗	底部	黒 (2.5Y2/1)	にぶい黄褐 (10YR6/4)	微密	
10	3b	1b	瓦器?	口縁部	黄褐 (2.5Y5/1)	灰白 (2.5Y7/1)	石英	
11	1b	IIc	陶器	口縁部	褐灰 (7.5YR4/2)	浅黄 (2.5Y7/3)	微密	須恵質

[石器]

番号	調査区	層位	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	石材	蛍光X線分析データ				
								Rb分率	Mn × 100Fe	Sr分率	LogFe/K	
12	1b	IV	石鎌	2.3	1.95	0.45	安山岩か	14.76	1.97	48.01	1.47	不明
13	1a	IIa	剥片	2.8	5.0	1.15	黒曜石(不純物混在)	26.50	3.61	1.92	1.16	印通寺
14	1b	III	石劍	(5.75)	3.05	0.6	頁岩					
15	1b	III	剥片(磨製石器)	5.25	2.82	0.55	頁岩					

7は龍泉窯青磁碗底部である。内面と外面には薄く明るい緑の釉薬がかけられ、高台の豊付から内部にかけては無釉である。見込みには花弁状の刻印がみられる。8は青磁碗の胴部の下半部であり、高台との接合部分が残る。内外面ともに釉薬が見られ、貫入が多く見られることから朝鮮系の可能性が高い。9は小型の天目碗と思われる。内面に黒色の釉薬が施されており、外面は露胎しており輻轆目の痕跡が明瞭に残る。10は国産の瓦質の鉢口縁部である。内面には細かな刷毛目が見られ、口唇の成形にはヘラ状の工具が用いられていることから稜が見られる。11は小豆色の胎土で器壁が乳白色の須恵質の小型壺口縁部で、口径が約6cmを図る。器壁は薄く、口唇部は外に大きく広がる形状である。外面に明瞭な稜が見られ、その位置からやや内側に屈曲する。時期は不明。

12は完形の石鎌である。両面ともに細かい調整が施されており、石材は安山岩製と思われる。側縁は若干外側に湾曲し、脚部は幅広く角ばっており「鍬形鎌」の形状である。長さは2.3cm、幅は1.95cm、厚さは0.45cmで、全面に風化が見られる。「鍬形鎌」であれば縄文時代前期にあたり、弥生時代の遺物包含層の下層にあたることから古い遺物である可能性が高いが、原の辻遺跡周辺からこれまで縄文時代前期の土器の出土が見られないことから、非常に貴重な資料といえる。13は漆黒色黒曜石の横長剥片で、不純物が多くリングやフィッシャーが明瞭に見られる特徴を有することから印通寺産黒曜石の可能性が高い。上面には平坦な打面調整が丁寧に施され、裏面右側端部に片側からの連続した調整痕がみられる厚手の剥片である。部分的に端部に欠損した痕跡は多く見られるが、刃部の調整痕などは見られない。14は磨製石剣の刃部の一部である。風化が著しく研磨の痕跡はほとんど確認されない。身幅は3.05cmで、表にかすかに稜が確認されるが、裏面は剥落している。石材は薄い緑色の頁岩である。15は磨製石器の石材で、薄い緑がかった頁岩である。表は粗い加工痕が部分的にみられるものの裏は一時剥離面のみで研磨の痕跡などは見られない。

(4) 小結

今回の閑縁地区の調査では、過去に確認された弥生時代前期末から中期にかけての墓域西側の広がりを確認するために発掘調査を実施したが、造成土が厚く、遺構面まで掘り下げることができなかつたことから確認には至らなかった。過去の調査で墓域が確認された遺構検出面は標高約6.5mであり、今回の調査区で最も近い位置にある3b区の弥生土器が出土した5層上面の高さが約6.0mであることから、墓域が立地した丘陵は今回の調査区までは伸びないと想定される。調査区東側に流れる側溝の上流には山手からの湧水地があり絶え間なく山水が流れていることから、古くからある河川等で寸断されていることが推測される。この閑縁地区は平成7年度の調査で墓域以外にも弥生時代前期末から中期後半の居住域があったと想定されている。その中には石器製作を裏付ける未製品の石材なども多数出土したという成果もある。今回出土した遺物には少数ではあるが、磨製石剣や磨製石器の石材などが出土しておりそれを補足している。土器においても、擬無文と思われる弥生時代前期末から中期初頭に想定される土器が出土している。いずれも周辺地域から流れ込みと思われるが、調査区の隣接地に当時の生活域があることは間違いないだろう。

2. 大川地区の調査

(1) 調査概要

大川地区的調査区は、これまで古代の遺物が出土した地点の北側丘陵上にあたり、平成11年度に幅1mの細長いトレンチ（4区）が設定されているところである（第8図）。ただ、当時の調査の記録は何も残っていない。今回の調査は遺構の有無と広がりを確認することを目的としており、対象地にグリッドを設定し広範囲の発掘調査を実施した。グリッドは5m×5mで設定し、北から南に1区から5区、東から西にA区からD区と付号した。当該地はもともと水田であったが現在は耕作が放棄され荒蕪地となっている。調査は表土剥ぎから人力で行った。またグリッドの境界は土層確認と作業用通路のために幅1mのベルトを残して掘り下げた。

調査区は旧水田であることからほぼ平坦な地形であるが、旧状はかなり起伏がある地形であったことがわかり、全体的には削平されているものの、近世以降につくられた水路や通路と思われる痕跡が1A区から3A区にかけて確認された。当初の目的であった古代の遺構については、ピットや溝状の落ち込みなど不明瞭な痕跡は確認されたが、建物跡や溝など人為的に作られた遺構等は確認されなかつた。ただ調査区の南側にかけて遺物包含層が薄く残っており、小片ながら多くの遺物が出土している。基盤層であるにぶい黄褐色粘質土層からは黒曜石の小片が出土しており、旧石器時代の文化層と考えられる。

(2) 基本層序

I層 耕作土

II層 撥乱層 近現代の造成土

III層 黒褐色（7.5YR5/2）粘質土 中世から古代の遺物包含層

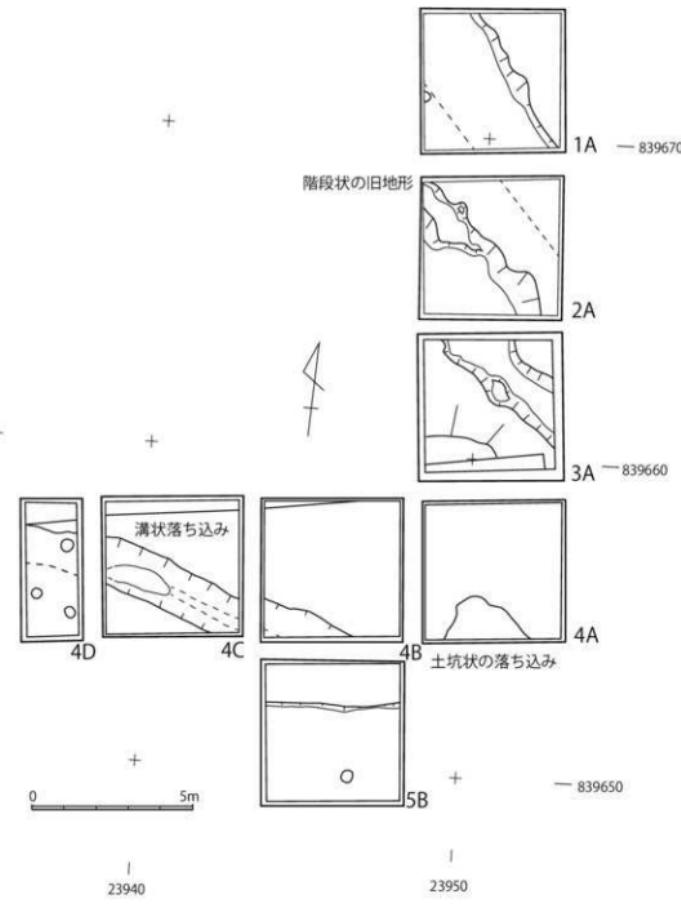
IV層 にぶい黄褐色（10YR5/3）粘質土 旧石器時代の文化層に類似。黒曜石はわずかに出土。

V層 橙色（7.5YR4/3）風化疊混在土。地山。

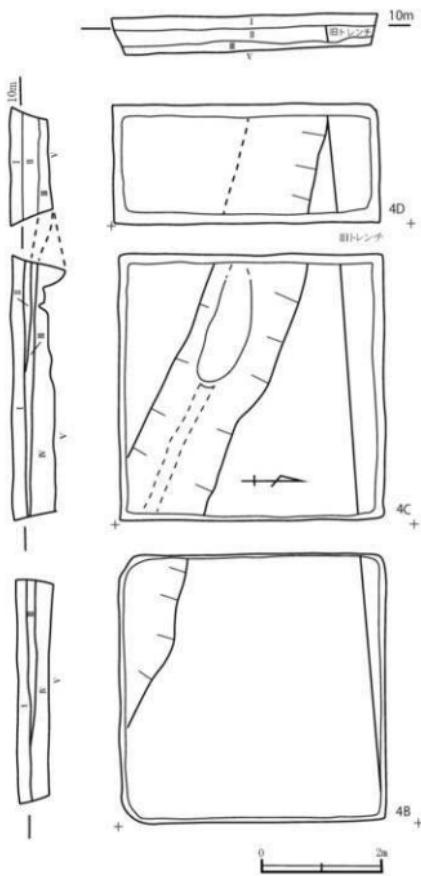


第8図 令和元年度 大川地区調査区位置図 (1/1,500)

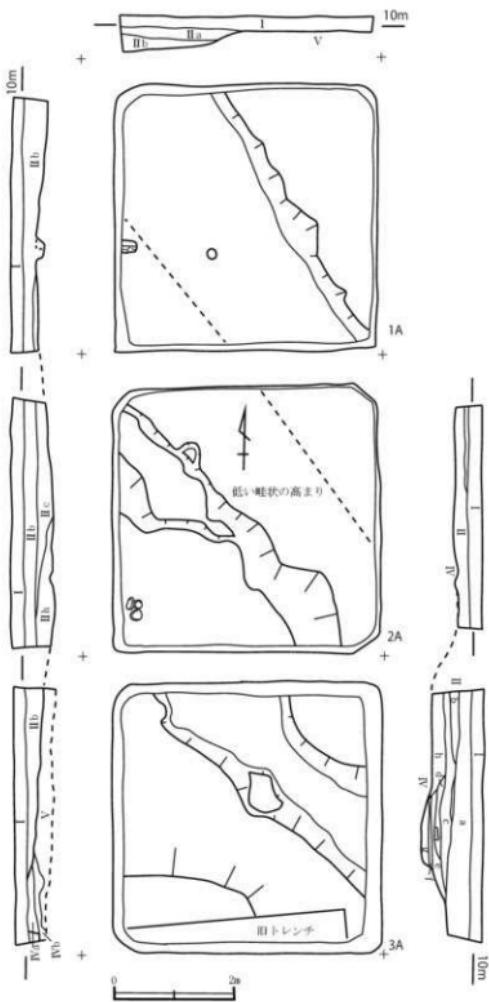
1A区は耕作土の直下にV層の風化礫混在土がみられるが、近現代の掘削跡埋土中にはⅡ層の造成土が混在する。2A～3A区の掘削跡中のⅡ層以下の層位は細かく分層され、一時期に埋没したのではなく、長期にわたり様々な要因によって埋まっていったことが分かる。特に3A区の下層からは、黒曜石剥片や須恵器、石帶の一部と思われる石製品などほぼ磨滅がない状況で出土しており、遠距離からの混入は考えられない。4A～4B区は耕作土直下にIV層があり、黒曜石の小片がまばらに出土している。小片の中には3～5mm程度の原石も含まれており、石材として持ち込まれたことは考えられず、もともと層位の中に含まれているものと思われる。4C区の南側、4D区、5B区にはⅢ層黒褐色粘土層が確認されており、古代から中世の遺物が含まれている。ただIV層は不明で、Ⅲ層を除去するとV層風化礫土が露出する。



第9図 令和元年度 大川地区調査区及び遺構配図 (1/150)



第10図 大川地区 溝状落ち込み検出状況及び土層図 (1/80)



第11図 大川地区 階段状遺構検出状況及び土層図 (1/80)

(3) 遺構（第9図）

①ピット

4D区に3ヶ所、5B区に1ヶ所確認されている。4D区のピットは径約30~40cmではほぼ円形。深さは20~30cmを測る。遺物は見つかっていない。柱跡とも考えられるが、並びは確認されず明確な根拠はない。5B区のピットは径約30cmで断面はレンズ状で深さは約10cm。いずれも黒褐色粘質土の埋土である。

②溝状落ち込み（第10図）

4B~4Dにかけて確認された、北西から南東に続く幅約1mの深い落ち込みである。断面はレンズ状で深さは10cm程度である。黒褐色粘質土の埋土で流れ込んだ古代の遺物などが散在する。

③近現代に埋められた階段状の旧地形（近現代の掘削跡）（第11図）

1A~3A区にかけて確認された。上層は造成土層と考えられ、瓦や陶磁器、プラスチックなどが含まれていた。下層は幾層にも分層できる堆積層で粘質も強い。1A区では北東が高く南西にかけてテラス状に平坦な地形が続き、2A区ではさらに南西にかけて落ち込んでいる。3A区は最も深くなる溝状の地形であり、最下層には粘質土層が堆積している。1A区から2A区、2A区から3A区と階段状に下がる形状から判断すると、北西から南東に続く道とその西側を流れる水路跡の可能性が高い。この地形がいつごろから形成されていたかはわからないが、古代から続く地形が残存していたという可能性も否定できない。埋土の下層からは須恵器の甕、鉄滓、石帶の一部と思われる石製品などが出土している。

④その他

4Aの南側に不定形の土坑状の落ち込みが確認された。プランは明瞭な部分と不明瞭な部分とがあり明確な遺構とはとらえられなかった。調査区の南壁にかかるところからサブトレントを設定し掘り下げたところ深さ約50cmの掘り方が確認された。層位は下層の地山や風化礫などが上層に上がるような天地返しの状況が確認されたため、風倒木による倒木痕の可能性が高い。

(4) 出土遺物（第12~14図・第3表）

今回の調査区からは、黒曜石の剥片やチップ、原石など、須恵器、土師器、初期貿易陶磁器などが出土している。特に須恵器甕の破片が多く目立つ。土師器は小片が多くみられたが、器種や部位がわかるものはほとんどなく、図化できなかった。以下、形状・部位が明らかな遺物について図化し説明する。

1~4は越州窯青磁である。1は碗の口縁部で、胴部の張りがないほぼ直線的な立ち上がりの形状である。碗ⅠA類。2は合子の受け部で、蓋と交わるところのみ無釉だが、外面・口唇・内面には深緑の釉薬がかけられている。胴部に沈線と浅い段を有する。合子の出土は非常に珍しい。3は碗の底部で、胎土目の蛇の目高台をもつ。内面や見込みには文様は見られない。4は碗底部で、内面は剥落している。高台は無釉であるが、胴部には摩滅は見られるものの釉薬が残る。蛇の目ではないものの比較的幅広の低い高台であり、碗ⅡC類に比定できる。

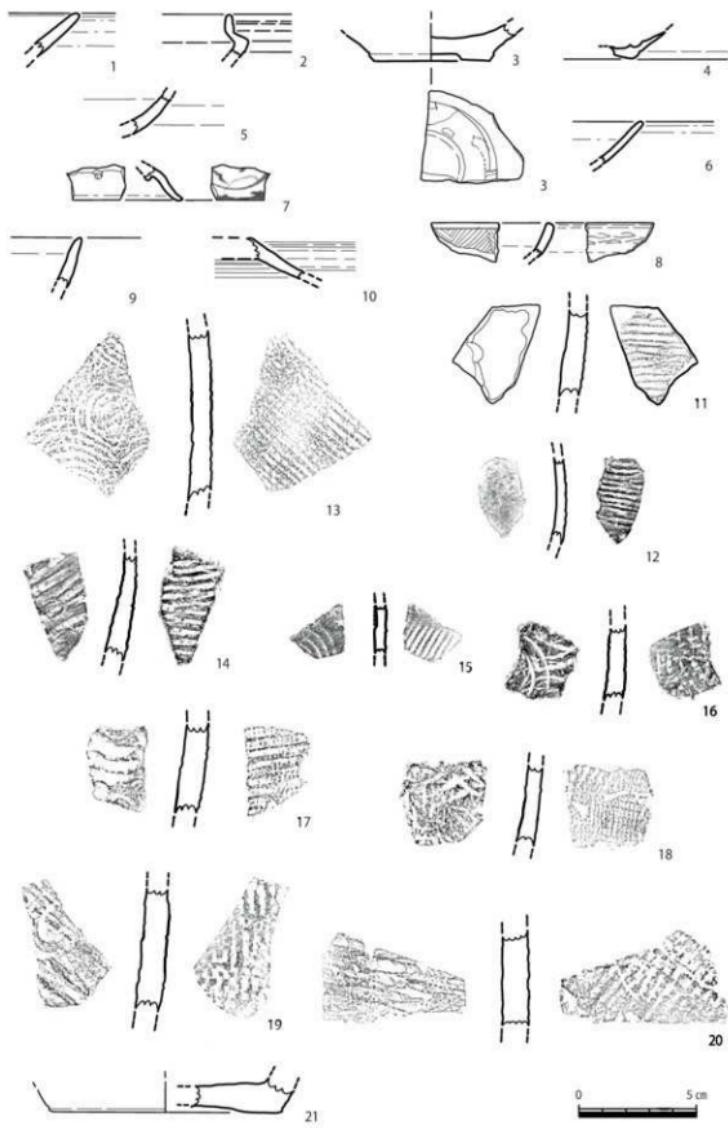
5は小型碗の胴部下半部であり、内外面にぶい黄色の釉薬が施され、外面高台近くは施釉が見られず、輪轍目のあとが明瞭に残る。胴部は丸く張り出す形状で、釉薬の特徴などから李朝時代の陶器と推察される。6は胴部が丸く膨らむ小型碗の口縁部で、器壁が薄く、乳白色の釉薬がかけられており、外面の口縁下部に鮫肌手が見られる。時期、産地未定。7は中国漳州窯の青花で、器壁が薄いことから蓋の口縁部と考えられる。胴部は若干丸みを帯び、端部が外反する形状で、外面の口唇と胴部

に鈍い青色の呉須手の文様、内面口縁には薄い1条の線が見られる。8は肥前皿口縁部。内面は鮮やかな呉須手の綾杉文、外面は口縁に退化した雷文が描かれている。端部は直線的であることから、角皿もしくは多角形の形状が予想される。

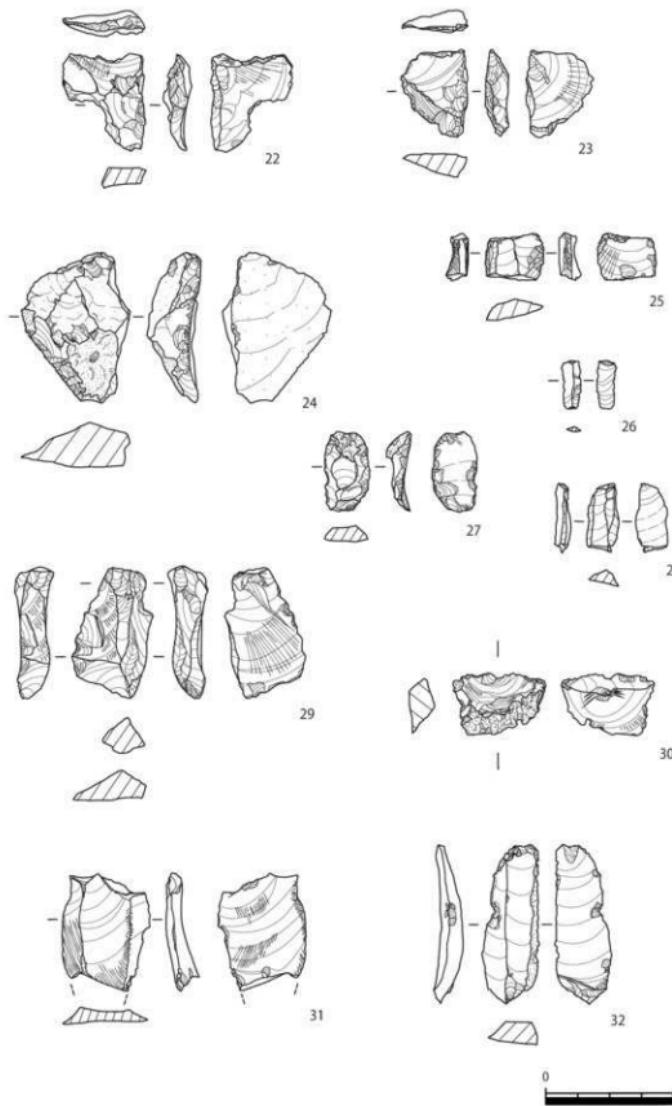
9～21は須恵器である。9は坏口縁部で内外面に轆轤の痕跡が残る。10は坏蓋の胴部である。轆轤目が顯著であり、内面には刷毛目が見られる。11～20までは、壺の胴部である。11・12は外面が平行叩き目、内面は指ナデが確認できる。13～20は外面に叩き目、内面に当て具の痕跡が見られる。13は格子文の上に平行文、内面は青海波文。14は内外面に平行文、外面に黒色の自然釉が残る。15は薄手で、外面に格子文と一部にカキ目、内面は青海波文。16は外面格子文、内面青海波文。17は外面が網目状の文様を呈する平行文、内面は青海波文。18は焼成が甘く赤色を呈し、外面に格子文と一部カキ目、内面は青海波文。19は外面が格子文、内面は青海波文の上に平行文。20は外面が格子文、内面が平行文である。21は壺底部で、外面に粗いヘラ状工具によるナデ調整、内面は轆轤によるナデ調整と指頭圧痕が見られる。

22～36は石器及び石製品である。22は台形石器で、左側刃が大きく内湾するL字型の形状である。刃部と思われる上縁部は刃毀れ後再加工が施されている。また右側縁は直線で、丁寧な調整痕が見受けられる。裏面は一次剥離面のみで細かい調整等は見られない。石材はややすくすみのある青灰色の黒曜石で、不純物がわずかに含まれている。23も台形石器で、楔型の形状である。右側縁に表からの細かい調整が見られるが、左側縁は粗い刃潰し加工のみである。刃部である上縁部は人為的な調整の裏路があり、右側縁からの直角を意識した加工に見える。裏面は打瘤痕を残す一次剥離面のみである。石材は透明度がある漆黒色の黒曜石で、松浦牟田産と推測される。24は表皮が残り全体的に風化した石材を加工して作られた台形石器未成品で、右側縁に表からの丁寧な打面調整、左側縁の下端部に直線的な表からの細かい刃部調整が見られる。石材は青灰色の黒曜石で表皮に凹凸が多数ある円礫であることから、針尾産の可能性が高い。25は縱長剥片の上下を裁断し作り出された長方形の剥片で、表面の左側に細石刃を剥ぎ取ったと思われる稜線が残る。ただ、細石刃核としては小型で厚みもないため確定は難しい。上下の裁断方法は、明らかな打瘤痕がないことから折り割った可能性が高い。26は細石刃と思われる。長さは約1.4cm、約0.5cm。透明度のある漆黒色の黒曜石である。27は表皮を残す縱長剥片で、小型の円礫が母岩として想定される。右側縁と左側縁の一部に細かい加工痕が見られるが、表土からの出土でもあり、裏面に多数の剥落痕が見られる。28は小石刃で、長さ約2.0cm、幅約0.9cmを図る。石材はややすくすみのある漆黒色の黒曜石である。29は上端部に厚みのある縱長剥片で、表側からの調整により茎状の削りだしが見受けられる。透明度のある漆黒色の黒曜石で、松浦牟田産と推測される。30は表皮が残る横長剥片で、調整等は見られない。表皮には小さなくぼみが多数ある円礫が想定され、ややすくすみのある漆黒色の黒曜石である。31は下部が欠損した縱長剥片である。表には明瞭な稜線があるが、調整等は見られない。黄白色の斑紋がある漆黒色の黒曜石である。32は表皮を残す縱長剥片で、表面に明瞭な稜線が見られる。石材は透明度のある漆黒色の黒曜石で、表皮の状況から円礫が想定され、松浦牟田産と推測される。33は完形の縱長剥片で、両側縁に多数の剥落痕が見られるが、左側縁の一部に細かい加工痕が残る。全体の反り具合から円礫を母岩とすると推測され、透明度の高い漆黒色の黒曜石であることから、松浦牟田産とおもわれる。34と35は黒曜石原石。漆黒色で表面には多数の凹凸が見られる。印通寺産か。但し石器を作り出すほどの大きさはない。

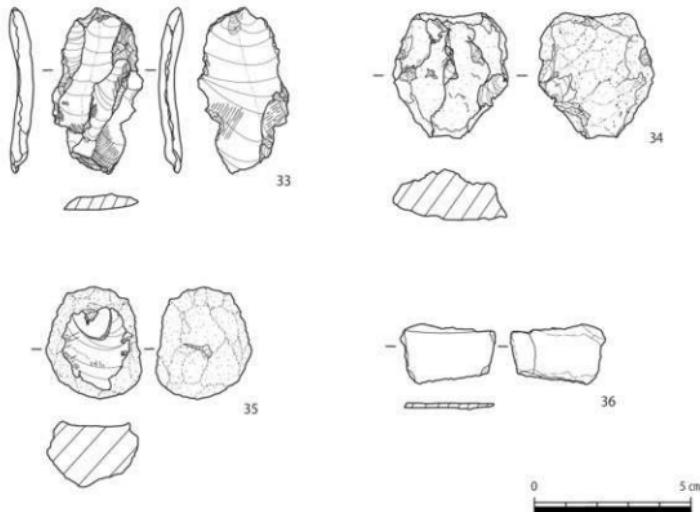
36は黒灰色の粘板岩を素材とする石製品である。非常に丁寧な研磨が施されており、薄く剥離した状態で出土している。時期や用途は不明だが、石帶の一部の可能性もあることから図化した。



第12図 令和元年度 大川地区出土遺物 ①（土器・陶磁器等）（1/2）



第13図 令和元年度 大川地区出土遺物②(石器)(2/3)



第14図 令和元年度 大川地区出土遺物③(石器・石製品) (2/3)

第3表 令和元年度 大川地区出土遺物観察表

[土器・陶磁器]

番号	調査区	層位	器種	部位	色調		胎土	備考
					外	内		
1	5B	Ⅲ	青磁碗	口縁部	灰オリーブ (5Y5/2)	灰オリーブ (5Y5/2)	緻密	越州窯
2	4C	I	合子	受け部	灰オリーブ (5Y5/2)	黄褐 (2.5Y5/3)	緻密	越州窯か?
3	5B	Ⅲ	青磁碗	底部	浅黄 (5Y7/3)	オリーブ黄 (5Y6/3)	緻密	越州窯
4	4A	I	青磁碗	底部	灰黄 (2.5Y6/2)		緻密	越州窯
5	1A	I	陶器	胴下半部	灰黄 (2.5Y6/2)	に赤い黄 (2.5Y6/3)	緻密	李朝小?
6	3A	II	陶器	口縁部	浅黄 (2.5Y8/3)	浅黄 (2.5Y8/4)	微細、やや軟質	鮫肌・中國か?
7	5B	II	青花蓋	口縁部	灰白 (7.5Y8/1)	灰白 (5Y7/2)	微細	漳州窯
8	4A	I	染付壺	口縁部	灰白 (2.5GY8/1)	灰白 (NS/8)	緻密	肥前
9	5B	Ⅲ	須恵器壺	口縁部	灰 (5Y5/1)	黄灰 (2.5Y4/1)	白色粒子	
10	4C	I	須恵器蓋	胴部	灰白 (7.5Y7/1)	灰白 (7.5Y7/1)	白色粒子	
11	4C	Ⅲ	須恵器壺	胴部	灰白 (5Y7/1)	灰白 (10YR7/1)	微細	
12	4C	Ⅲ	須恵器壺	胴部	灰 (N4/0)	灰 (N5/0)	白色粒子	
13	3A	Ⅲ	須恵器壺	胴部	暗灰 (N3/0)	灰 (5Y5/1)	白色粒子	
14	1A	I	須恵器壺	胴部	黒褐 (2.5Y3/1)	に赤い黄褐 (10YR6/4)	微細	
15	3A	I	須恵器壺	胴部	黑 (2.5Y2/1)	黄灰 (2.5Y6/1)	白色粒子	
16	3A	I	須恵器壺	胴部	黄灰 (2.5Y6/1)	灰 (N6/0)	白色粒子	
17	5B	Ⅲ	須恵器壺	胴部	褐灰 (10YR4/1)	灰 (7.5Y6/1)	白色粒子	
18	4D	I	須恵器壺	胴部	褐灰 (7.5YR4/2)	に赤い赤褐 (5YR5/4)	白色粒子・赤色粒子	
19	4C	Ⅲ	須恵器壺	胴部	灰 (N4/0)	黄灰 (2.5Y5/1)	微細	
20	4C	Ⅲ	須恵器壺	胴部	灰 (N5/0)	灰 (N5/0)	白色粒子	気孔がみられる
21	3A	Ⅲ	須恵器壺	底部	灰白 (5Y6/1)	灰 (N4/0)	長石	

[石器・石製品]

番号	調査区	層位	形種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	石材	蛍光X線分析データ				
								Rb分率	Mn×100Fe	Sr分率	LogFe/K	原産地
22	4C	III	台形石器	305	260	0.85	黒曜石(青灰色)	34.12	2.86	14.65	0.97	針尾産(三群)?
23	1A	I	台形石器	275	210	0.70	黒曜石(漆黒色)	41.92	3.81	10.08	0.87	松浦半田(4産)?
24	4D	III	加工痕のある調片	470	340	1.50	黒曜石(青灰色)	30.60	2.78	15.76	1.00	針尾産(三群)
25	4C	I	調片	145	180	0.70	黒曜石(漆黒色)	40.95	4.84	12.68	0.91	腰岳系
26	5B	III	細石刃	150	0.60	0.20	黒曜石(漆黒色)	42.74	4.02	12.87	0.95	腰岳系
27	1A	I	加工痕のある調片	250	160	0.75	黒曜石(漆黒色)	41.13	4.05	12.56	0.97	腰岳系
28	4D	III	小石刃	215	100	0.50	黒曜石(漆黒色)	41.78	3.97	12.90	0.96	腰岳系
29	1A	II	加工痕のある調片	410	260	1.20	黒曜石(漆黒色)	41.40	4.28	12.30	0.93	腰岳系
30	5B	III	調片	190	290	0.80	黒曜石(漆黒色)	35.65	3.33	11.83	0.90	松浦半田産?
31	2A	II	調片	365	275	0.70	黒曜石(漆黒色)	40.93	3.93	12.73	0.95	腰岳系
32	3A	II	調片	500	180	0.70	黒曜石(漆黒色)	40.23	4.27	12.74	0.98	腰岳系(松浦半田産)
33	2A	I	加工痕のある調片	535	290	0.80	黒曜石(漆黒色)	41.54	3.95	12.67	0.94	腰岳系
34	5B	II	原石	400	370	1.60	黒曜石(漆黒色)	27.65	3.78	2.03	1.17	印通寺
35	4C	II	原石	360	305	2.10	黒曜石(漆黒色)	22.76	2.99	2.56	1.15	印通寺?
36	3A	III	石製品	190	305	0.20	貝岩					

(5) 小結

大川地区的調査では、これまで遺物が確認されていた古代の遺構の確認を目的に発掘調査を実施した。特にイスラム陶器を始め初期貿易陶磁器である越州窯青磁や白磁などが出土した地域でもあり、近くに官衙が想定されることから高台に建物等が存在することを大いに期待し調査を実施した。地権者の承諾をいただき、遺構の広がりを確認する目的から、トレーナーではなくグリッドを設定し、広範囲に調査を実施し確認を行った。ただ、残念ながら明確な古代の遺構については確認することはできなかった。遺物包含層は丘陵の南端部に残存することは明確で、さらに調査範囲を広げることにより明らかになるものと確信している。官衙としての遺構がどのような規模であるかは不明であるが、壱岐の中で本土側の港である印通寺から壱岐国府へ続く道沿いの地域であることは間違いなく、今後の継続的な調査に期待したい。

III.まとめ

(1) 原の辻遺跡における閑縁地区の位置づけ

原の辻遺跡の閑縁地区は、原の辻遺跡の集落が立地する丘陵の北側にあたり、標高約7m前後の丘陵の先端部と谷部にあたる地区である。この地区は過去に5回の調査履歴があり、弥生時代前期末から古代にかけての遺構や遺物が確認されている。

最初の調査は前述しているとおり、閑縁地区的東側丘陵の先端で行われた昭和29年度の東亞考古学会の調査であり、弥生時代前期末から中期前半の甕棺墓や箱式石棺墓が発見された。この墓域は平成7年度と平成10年度の長崎県教育委員会による圃場整備に伴う調査においても確認され、その時期や性格が明らかになったところである。ただ、今回の調査ではその墓域の広がりは確認されなかった。したがって墓域は閑縁地区的東側丘陵に限られた範囲で収まるということが結論付けられよう。

一方、閑縁地区的西側については平成7年度の圃場整備と平成18年度の県道改良工事に伴って発掘調査が実施されている。平成7年度は当時安国寺前A遺跡といわれており、丘陵の南端に沿う位置に調査区が設定され、弥生時代の大溝(河道路)や土壤、沼状落ち込み、古墳時代の溝が確認されている。出土遺物については弥生時代前期末から中期中葉と、古墳時代前期に限った遺物が出土しており、

原の辻遺跡の中で出土する遺物としては比較的古い様相と新しい様相を端的に示している。また、石器として、石斧や石剣、石鎌などの磨製石器の完形品や未成品、素材などが大量に出土しており、石器製作の工房が示唆される状況である。平成18年度の調査では大溝に続く河道路跡が確認され、土器や石器においても平成7年度とはほぼ同様な成果が確認されている。今回の調査においても、少量ではあるが石剣や素材が出土しており、それを裏付ける成果といえ、閑縁地区西側から延びる丘陵の縁辺部が今回の調査区（1区）まで延びることが推測できる。

これまでの調査成果から考えると、原の辻遺跡における閑縁地区の位置づけは、原の辻遺跡の拠点集落が成立する以前から石器製作の技術を有する工人を中心とした小規模な居住域が形成され、東側には同時期の墓域が造成されていたことが考えられる。ただ、土器については粘土帶土器等、外來系土器はほとんど出土しておらず不條地区と異なり国内の影響下にある工人の可能性が高い。その後、居住域は原の辻遺跡の拠点集落へ吸収される。ただ古墳時代前半には再び集落の分散化がおこり、その一角として再び集落が形成され、俵山古墳や大塚山古墳へと続く4世紀から5世紀にかけての古墳の形成につながると想定される。

（2）原の辻遺跡における古代（7世紀から12世紀）の様相

壱岐における7世紀から12世紀にかけての遺跡の中心域は勝本町亀石周辺であり、6世紀後半から7世紀にかけての巨石古墳群や壱岐鶴分寺などが多数所在している。ただ、原の辻遺跡においても古代における遺物が一定量出土している。これまでの調査で原の辻遺跡内からは8地区で古代から中世前期にかけての遺物が出土している（第15図・第4表）。

8世紀から9世紀にかけての比較的古い時代の遺物は丘陵から幡鉢川を挟んだ北側にあたる閑縁地区・川原畠地区と、丘陵南側の大川地区・原ノ久保地区に集中する傾向にある。特に越州窯系青磁などの重要遺物は安国寺に隣接する閑縁地区と大川地区に限られており、古代の官衙的な施設の存在が示唆される。前段の第1章2項の歴史的環境の中で若干触れたが、壱岐の地名として「延喜式」に「優通駅」があり、「印通」になったという考察があることから、今の印通寺が当時の港として使われていたことは有力である。時期は下るが、1471年に李氏朝鮮の宰相申淑舟により刊行された歴史書「海東諸國紀」には壱岐十四浦の一つとして「因都溫面浦」と記されていることからも古くから主要な港であったことがわかる。印通寺港から北に直行すること約2kmで原の辻遺跡南側に至ることから大川地区がその交通路沿いと考えることが自然である。原の辻丘陵上には古代の遺物もなく経路は判明しないが、少なくとも安国寺周辺に関連する遺物が集中することを考えると丘陵近くに道があることは判断できる。川原畠地区で幅約6mの平行する2条の溝により確認された道路状遺構はそれを裏付ける有力な成果ではないだろうか。

不條地区や八反地区的低地部においては遺物の量は少ないものの、8世紀から10世紀にかけての遺物を中心に出土がみられる。深江田原平野は、弥生時代から水田地帯が広がっていたことが自然科学分析などからわかつており、現代に至るまで穀物の生産が見込まれる優良な農地である。古代においても同様と考えられ、灌漑施設の遺構などから、広大な水田が形成され、一定の米の生産が見込まれる水田地帯であったと推測される。そのように考えると各時代においてこの広大な水田地帯は財を蓄えるための重要な場所あり、奈良時代においてはこれを管理する役所があり、その後官人が在地化し

有力豪族として莊園を構え莊園領主になるなどして拠点を構えた場所となったことが想像できる。これらのことと併せて、巨石古墳の築造や壱岐鷲分寺跡での同范の平城京軒丸瓦の出土、串山ミルヌ浦遺跡の「調」として納められたアワビの加工場の存在などは、壱岐が大陸との交流の中継地であるとともに、国や地域の生産基盤を支える重要な場所であったことにつながる根拠といえるかもしれない。



第15図 原の辻遺跡における古代から中世初期にかけての遺物出土地点

第4表 原の辻遺跡における古代から中世初期にかけての出土地区及び出土遺物一覧表

番号	地区	遺構等	遺物	時期
1	閑緑	溝状遺構	越州窯系青磁	8c
2	閑緑	包含層	越州窯系青磁	9c
3	川原畠	包含層	須恵器・白磁・青磁	12c
4	川原畠	道路状遺構	須恵器坏身・瓦	8c中～後半
5	川原畠	包含層	須恵器	
6	不條（磯）	包含層	土師器・白磁など	10～11c
7	不條	河川・包含層	土師器・須恵器・	8～12c
8	不條	包含層	土師器・白磁	10c前半～12c前半
9	八反	包含層	土師器・瓦器・白磁	10～12c前半
10	八反	包含層	須恵器・白磁	8cごろ
11	八反	包含層	土師器坏・碗・綠釉陶器	9c後～10c前
12	石田高原	包含層	須恵器・白磁・瓦器・青磁	6c前～8c前半
13	石田高原	落ち込み	須恵器・白磁	8c
14	石田高原	包含層	須恵器・土師器・白磁	12c
15	石田大原	包含層	須恵器	6c末～7c
16	大川	包含層	須恵器	
17	大川	包含層	越州窯系青磁・白磁・長沙窯系水注・綠釉陶器・須恵器・土師器など	8c末～12c前半
18	大川	包含層	越州窯系青磁・白磁・長沙窯系水注・イスラム陶器・須恵器・土師器・製塙土器など	8～9c
19	原ノ久保	土坑・包含層・住居跡	須恵器坏・壺・土師器・越州窯青磁	8c後半～10c
20	原ノ久保	包含層	須恵器	
21	原ノ久保	包含層	須恵器	6c後半
22	原ノ久保	包含層	須恵器坏蓋・坏身	6c後半

〔参考文献〕

『角川日本地名辞典 42 長崎県』角川書店 1978

林 隆弘 2006 『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第34集 長崎県教育委員会

山下英明・川口洋平編 1997 『原の辻遺跡・安国寺前A遺跡・安国寺前B遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第1集 長崎県教育委員会

山口 優 2012 『老岐の島の古墳群～現状調査』老岐市文化財調査報告書第20集 老岐市教育委員会

宮本一夫編 2018 『老岐原の辻閑緑遺跡・妙泉寺古墳群・鬼の窟古墳』九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室

写 真 図 版



調査区近景（閑緑地区）



表土剥ぎ（閑緑地区）



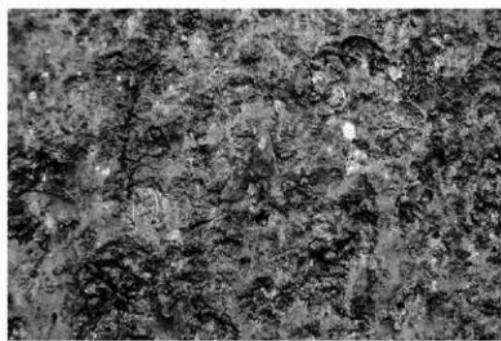
作業風景（閑緑地区1b区）



閨縁地区1a区北壁土層堆積
状況（南から）



閨縁地区1b区北壁土層堆積
状況（南から）



閨縁地区1b区石器出土状況



閨緑地区3b区北壁土層堆積
状況（南から）



作業風景（閨緑地区3b区）



壱岐市立石田小学校遺跡
見学（閨緑地区）



作業風景（大川地区）



作業風景（大川地区）



航空写真撮影作業風景（大川地区）



大川地区階段状遺構検出状況
(1A区～3A区) (南から)

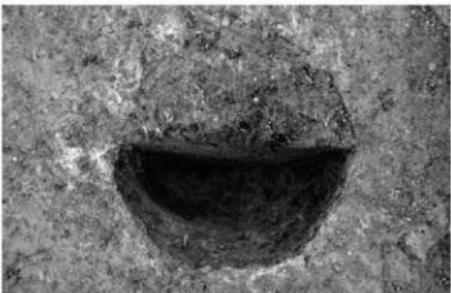


大川地区3A区石器出土状況



大川地区溝状落ち込み検出状況
(4C区) (南から)

図版6



大川地区4D区ピット検出状況（南から）



大川地区5B区遺物出土状況（南から）



壱岐高校コース体験発掘（大川地区）



龍谷大学学生測量補助（大川地区）



原の辻遺跡調査指導委員会
(大川地区)



令和元年度 間縫地区出土遺物（左が表、右が裏）



令和元年度 大川地区出土遺物（左が表、右が裏）

報告書抄録

ふりがな	はるのつじいせき						
書名	原の辻遺跡						
副書名	令和元年度 原の辻遺跡調査研究事業調査報告書						
卷次							
シリーズ名	長崎県埋蔵文化財センター調査報告書						
シリーズ番号	第37集						
編著者名	寺田正剛						
編集機関	長崎県教育庁長崎県埋蔵文化財センター						
所在地	〒811-5322 長崎県壱岐市芦辺町深江鶴亀触515番地1 電話0920（45）4080						
発行年月日	西暦2021年2月26日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 °°°	東經 °°°	調査期間	調査面積	調査原因
原の辻遺跡	長崎県壱岐市 芦辺町・石田町	42424	72-92	33°45'30" 129°45'53"	20191105～ 20191224	485m ²	令和元年度 原の辻遺跡 調査研究事 業（国庫補 助事業）
取録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
原の辻遺跡 (閨櫛地区・大川地区)	遺物包蔵地	弥生時代・ 古代・中世	(大川地区) 階段 状遺構・溝状落 ち込み・ピット	(閨櫛地区) 弥 生土器・瓦質土 器・石剣・青磁 など (大川地区) 台形 石器・剥片・原 石・須恵器・青 磁など			

長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第37集

原の辻遺跡

2021（令和3）年2月26日

発行 長崎県教育委員会
長崎市尾上町3番1号

印刷 株式会社 昭和堂